

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原 一夫 TEL06-6833-9227  
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田 茂夫 TEL072-850-5781  
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成16年5月(2004年) No.461

## 降りそうで降らなかった雨 まずは沼島撮影会無事終了

今年のゴールデンウィークは前半は晴天続きでしたが、後半は雨との予報が出ており、5月3~4日の両日の天候が心配でした。撮影会第一日目は朝から曇りでしたが、雨は降りませんでした。朝8時過ぎのJR快速で大阪駅を出発、舞子で淡路高速バスに乗りかえて終点福良着10時39分、更にローカルバスに乗って土庄港着、そこで沼島行きの船に乗船、凡そ10分で島に到着、時刻は12時少し過ぎていました。島では早や祭り太鼓が聞こえていました。祭りの屋台を見ながらお弁当を食べましたが、心は早くも撮影へと傾いていきます。目的の木村屋旅館に荷物を預けるのももどかしく、ビデオカメラと三脚をかついで撮影へ出掛けました。宮入り前の僅かの時間を利用して島の反対側にある奇岩のある海岸風景を撮影に行くグループもありました。

3台の屋台と2台のふとん太鼓が町を駆けめぐります。屋台は海の祭りということで、海の中へ入るのが圧巻でした。曳き手の男達が胸まで海水につかりながら屋台を曳き回す風景はやはり沼島ならではの光景でした。

二日目は大雨情報が出ていましたが、朝、曇っていて時々パラつく程度なので祭りは決行ということで、撮影の準備をして外へ出かけました。この日のメイン行事は丘の上にある神社から、お神輿をかつぎおろしてお旅所の弁財天さんまで屋台などを従えて行列するというものでした。ここまでは無事撮影完了でしたが、その後雨が激しくなり皆旅館へ引き返しました。一部の人は雨中に海に入る屋台をねらって撮影を強行した人も。かくて2時40分の船で帰路につきました。家に帰りついたのはおよそ4時間後の夜の7時頃だったでしょうか。何とか撮り終えた沼島の祭りに大満足でした。

### 5月例会のお知らせ

5月例会は22日(第4土曜日)18時より、難波市民学習センター(JR難波駅上OCATビル4階)にて開催します。皆さんの作品を楽しみにしています。どうぞ多数のご来場をお待ちしています。



■沼島撮影会参加者：有村、岩井、江村、岡本、奥、河合、合原、進藤、関、前田、増池、森、森田、吉岡、渡辺の15氏。

#### ■沼島撮影会作品公開審査は6月例会で

参加者の皆さん、せっかく撮った映像に陽の目を見せてやって下さい。ぜひ作品にまとめて6月例会に持ってきて下さい。優秀作の中より秋の公開映写会用に出します。作品の時間は制限しませんが例会時間を確保するために10分以内を希望します。

#### ■新入会員の紹介

下記の方が関世話役の紹介で入会されました。遠隔地なので例会出席は出来ませんが、作品を送って例会上映し、OMCニュースの講評でウデをみがきたいとのことです。どうか頑張ってください。

〒895-2513 鹿児島県大口市上町25-6

山口幸代 TEL 0995-22-0513

## 良枝さんを偲ぶ会

### プログラム決まる

7月4日(日曜日)難波市民学習センターで開催される「良枝さんを偲ぶ会」の上映プログラムが次の通り決定され、案内状印刷の運びとなりました。

#### ■上映プログラム(司会 合原一夫)

- 1) ヤンエグ通り(7分)、2) 平野よもやま話(7分)、3) 文殊さんの思い出(7分)、4) 化粧(4分)、5) 眼からうろこ(5分)、6) 頭の体操(7分)、7) 私のこだわり夫の食事(8分)、8) あそび縁日(7分)、9) シアトル空港にて(6分)、10) 被災犬フラン(9分)。

後半の部 ○思い出を語る 松村長二郎  
11) 追悼上映「良枝さんを偲んで」脚本構成 合原一夫(22分)、12) 足(3分)、13) 閃光(3分)、14) 妹夫婦のお引越し(10分)、15) 蘇れ法善寺横丁(7分)、16) 幸せをかみしめて・遺作(9分)。

上映を終えて、ご挨拶：安居利次、閉会以上の通りですが、皆さんのご協力ご支援をお願いいたします。

■今年も全国ビデオコンテスト募集が舞い込みはじめています。挑戦してみようという方は会長までご連絡ください。

## 4月例会のレポート

4月例会は気候もよくゴールデンウィークの前とあって、出席者も30名の大台に迫るかと思われたが、旅行者が多いのか25名にとどまった。しかし内容は良かった。

司会：安居氏、書記：関氏、機材：増池、江村両氏、受付：森口、奥両氏の担当。

■出席者：有村、今井、岩井、江村、奥、上総、金子、紙本、小竹、合原、進藤、関、中尾、華岡、藤原、前田、増池、松本、森、森口、森田、安居、山本、吉岡、渡辺の25氏(敬称略)と13作品でした。

■上映作品(今月の講評は関世話役です)

### 1.大阪城の桜

奥 宏さん 4分20秒

前月の大阪城の梅に続き今回は桜。晴天で人出も多く、青いシートの上では老若男女が酒盛りの真っ最中。東の間の季節を体いっぱい受けとめようとする雰囲気伝わってくる。ロング、ミディアムの配分も絶妙で、青空をバックにした花のアップが映えていた。作者は夜桜を楽しむ人々も実に巧妙なテクニックで撮っておられたが、ややあっさり終わった感がある。折角のすばらしいカット。もう少し時間をかけても良かったのではないか。夜間に変ってしばらく、ライトに浮かびあがったもの全てが真っ赤になってしまった。多分オートのままのホワイトバランスがタングステンライトについていけなかったのだと思う。ここは手動で設定するべきだった。

### 2.当麻の里

小竹 正さん 7分

8ミリ時代から引き継がれた撮影技術、その確立された絵づくりには定評がある。まず対象物を徹底的に観察し、フレームのどの部分にポイントを置くかの検証がすべてのカットに成されていたように思う。

作品はまず畦に彼岸花が咲くのどかな田園風景から入っていく。空の空間を大きくとった名もない野仏が印象深い。次いで竹之内街道もしくは門前町の古い家並み。煉瓦づくりの煙突や造り酒屋の高い板塀から伝統ある佇まいを見せてくれる。薬屋根の頂に太い竹を渡し、そこに装飾の松を置い



た此のあたりの民家の特徴も興味深い。画面からは物音ひとつしない静寂感があるだけに喜多郎の音楽が妙にうるさく感じた。

当麻寺に移ってから観光客らしい人の歩く後ろ姿がときどき出てくるが、内容に通じるところが見当らずあまり意味がない。

### 3. 湖北桜街道

森口吉正さん 8分56秒

琵琶湖畔のマキノから海津大崎を経て大浦に至る湖周道路は桜の名所。海津大崎の先端あたりは特にみごとだ。実際のトンネルもあるが、それに連なった桜並木はさながら桜のトンネルの様を呈していた。奥琵琶湖パークウェイのつづら尾展望台或は賤ヶ岳の頂上から撮った湖の俯瞰も美しい。

この作者のどの作品も、映像、構成、音楽、そしてナレーションなど、どこも非のうちどころのないみごとな出来栄え。ビデオ作りのお手本のようなのだが、なぜか鮮やかな印象として後々まで残らない。名水シリーズもそうだったが、そのどれも構成やテンポがほぼ同じであることに気がついた。

クローズアップにカットバックと言う主観的手法はあまり好みではないのかも知れない。

### 4. 知恩院 (ワイド)

前田茂夫さん 9分50秒

この作品については構成の概略を列記しながら論評を加えることにする。

一章。重厚な二層の三門を支える礎石と太い柱。アップの石段の奥から人の頭が現れズームで引くと、そこは石段が天まで延びるように続く男坂＝意表を突く表現ですばらしい映像。鐘を打つ僧と、参拝客と御水屋の角度を変えたカットバック。鐘を打つ間隔が次第に早くなる＝実にうまい編集だが、手洗い場のアップより参拝客に重点を置くべきだった。鶯張り廊下をローアングルでカメラが進み、独特の音が鳴る＝鶯張りテロップとその仕組を説明するPiPは必要だったのか。庭池の蓮がクローズアップになる頃から何かをイメージするような音楽＝曲自体が効果音の役目も果たすこの選曲はすごいと思った。大鐘楼を角度を変えて数カット。上から見下ろした男坂と女坂。塔を見上げるショットから左右に開

くトランジションで夜景に展開する。

二章。すべての建物がライトアップ。ブロンズの仏像が闇の中に浮かびあがる＝最も印象に残るショットのひとつ。長い石段の両側に無数の明かりが灯され、その中に大梵鐘を撞く様子モニターが映し出されている＝なぜこれがあるのか判らないが、あとに実像が出てくるので、この部分はまったく無意味だ。

三章。明けて、そぼ降る雨に濡れる石段とシンメトリーに切り撮った三門の奥に長い石段のロング＝知恩院の伽藍の特徴をよく表し、小さな人影が画面の効果を引立てている。水たまりに映る三門のひさし。石段の端を上っていく相合傘がひとつ＝この直前のロングとも同様、静寂感の中で絶好のアクセントになっていた。御水屋で手を洗う女性＝フルショットだがアップも欲しいところ。小枝から落ちる水滴のクローズアップ。雨にけむる東山連山が背後に浮かんで美しい＝このあたりのインサート処理が絶妙。御影堂の大屋根のロングと瓦のミディアム。開かれた障子の間から金色に輝く阿弥陀如来にゆっくりズーム。そのアップからオーバーラップ。

四章。再び夜間、鐘楼の周囲で大勢の僧侶の読経。17人の僧が綱を引き、掛け声とともに大梵鐘が打ち鳴らされる＝この作品最大の山場。さまざまな角度からの映像は圧巻であり、撮影には苦労のあとが伺えるが10回以上も続くのはあまりに多すぎた。最後はバックライトで光る石段を下りてくる人々のシルエット＝幕引きに相応しいみごとな映像だった。

#### 総論。

作者にはかつてなかった表現方法。ノンナレで暗示的な音楽が画面にぐいぐい引っ張られていく。これは作者の主観に導かれた心象風景だと私は確信した。

昼間と夜間がそれぞれ2回あったが、初めの夜間は、あとの大梵鐘を撞くシーンの前に統合してもよいのではないか。音声入力がオートに設定されていたのかゴツンという音しか聞こえない。そして、一瞬だが鐘を打った途端すべての音が消えてしまった。この鐘独特の重低音とそれに続く余韻



を聞かせるには歪むのを承知のうえで、あえてマニュアルで録るしかないと思う。

## 5. 空想

安居利次さん 4分

巷に“ゆめか、うつつか、まぼろしか”という言葉があるが、それに類した異色の作品。作者が仰向けになって、或は通りに腰掛けて想い巡らせたものは、雲とか花の中の女性の顔、目、口、赤い唇。それが日本人だったり外国人だったりする。円い縁どりの鳩は何を意味するのか、直ちに理解するのは難しい。空想なら実態はないはずだが、これはあまりにも写実すぎた。

作者が表現したいこと、それは判らないでもないが、実験映像的なテクニックが未完成だったと思う。

## 6. 水上市場

有村 博さん 9分18秒

タイ・メナム川のデルタ地帯。いつも観光客で混雑する市場を避け、早朝4時半に起きて車で2時間かけ、わざわざ遠いバンコク郊外にあるこの水上市場へ取材に行かれたそうだ。せまい水路にさまざまな物を積んだ手漕ぎの小舟が行き交う。まさに動くスーパーマーケットというところか。亜熱帯の花や果物は色鮮やかで種類も豊富、そして商売の主役はやっぱりおばちゃんたち。言葉は判らないが、カメラに向かって「買うて一なー」と言っているみたいだ。油をぐらぐら煮立てて揚げ物売っている小舟があった。もし他の舟が衝突してきたらどうなるだろう、と余計な心配をした。

水上生活者だが舟だけでなく両岸には家もある。その家づたいに少年僧たちが朝のおつとめ、托鉢をしていた。それが当然のように供物を捧げ一心に手を合わせる光景は同じ仏教国でも我々とは全く違う敬虔な人々であると感じた。このお坊さんも年ごろになると兵役が待っているそうだ。平和ボケしたどこかの国の若者が聞いたらさぞ驚くだろう。と作者。しかしこの国の人たちはみんな人懐っこく、その笑顔はすばらしかった。

この作者がいちど海外に出るとその撮る量は半端ではない。たぶん次回以降もタイの作品が4・5本出るとは思わないか。期待

しよう。

## 7. ディエンビエンフー

山本正夢さん 11分10秒

旅で知合ったフランス人のアンドレーとベトナム北部の田舎町を訪ねた時の記録。作者のナレーションを聞くのは初めて。ライチャウという町で新年を迎えた二人、そこから動力つきの小舟をチャーターし川を遡っていく。途中、赤モン族と呼ばれる少数民族が暮らす小さな村に立ち寄った。こうした少数民族を見分けるのは頭にのせた帽子の類、つまりその被り物にあるらしい。赤モン族の女性は三角帽子の前が上に突き出し、頭のうしろからショールで覆ったようなものを被っている。どうやら赤く派手なのが未婚で、黒いのは既婚の女性らしい。ここの産物は自然石を薄く裂いた屋根瓦、男がナタひとつで器用に瓦の形を整えていく。この村の佇まいは、その昔日本のどこか見たような懐かしい風景だった。

作者は再び舟とバスを乗り継いでディエンビエンフーへ。ここの少数民族は黒タイ族と呼ぶらしい。女性は黒いベレーに房の付いた花柄のハンカチを被せたようなものを着けている。アンドレーがその写真を撮るのに苦労している様子が面白い。ディエンビエンフーと言えはかつてフランスの支配から独立を勝ち取るきっかけとなったところ。いまでも当時の戦跡がなまなましく残っていた。アンドレーの心はさぞ複雑だろう、と旅の友人に気を使う作者の言葉。

今まで気付かなかったが、作者が不便な交通に耐えながらアジアの辺境を好んで旅するのは、めづらしい風景を訪ねるのもさることながら、こうした少数民族と出会うのが目的だったのかも知れない。アンドレーとハノイまで同行するとの話だった。

これからの作品にどんな人々が出てくるのか楽しみだ。

## 8. 水鳥の詩 (ワイド)

進藤信男さん 9分40秒

“旅立ちのとき”の副題がつく。湖北びわ町早崎内湖は主にコハクチョウの越冬地。水草の葉や茎を食べて体力を養い渡りに備えるそうだ。頭がすこし黒ずんでいるのが昨年生まれた若鳥か、大きさは親鳥とほと



んど変らない。数羽がかたまって互いに首を上下に振るシーンはコハクチョウたちの挨拶とテロップにあった。「もうそろそろ行こうか」とでも話しているのだろう。そのあと船の丸窓に似たものが出てきたが何だったのか判らない。

場所は変って加賀市片野鴨池。ここの主役は鴨や鷺など小禽類らしい。ここでも旅立ちの日が近いのだろうか。だが鴨が夜間に行動するとは知らなかった。

コハクチョウたちがさかんにはばたきの練習をしている。みんながおなじ方向に向けて移動をはじめ、やがていせいに飛び立った。名残を惜しむかのように何度も池の上空を旋回する優美な姿。それにオーバーラップして夕景の海岸でエンド。作者のナレーションは常に淡々とし、感傷的な言葉はなかった。

## 9. ワット シャロン

森田光春さん 6分30秒

タイ・プーケット最大の寺院だそうだ。天に向けて跳ね上がった棟飾りがタイ寺院の様式を象徴している。民衆の信仰心は厚く、花や供物を捧げてお参りするの当然の日課になっているのだろう。リアリティな仏さまが数体並んでいたが、信者が張りつけた金箔がところどころ剥がれ、それがわずかな風にもひらひら揺れるアップがおもしろい。位が高いと思われる人物を前に大勢の僧が頭を下げているシーンは何の儀式だったのだろう。作者の説明はない。

寺院前の広場での踊りは以前に拝見した「踊りを奉納」から流用したと思われるがそれとこの寺院とのカットバックは作者がこだわった割りには効果をあげていない。

静かであるはずの場面にも踊りの賑やか音楽が流れていたからだ。

## 10. ちゃんちゃん祭

江村一郎さん 9分30秒

大和神社はどこに在るのか場所は判らない。そこから行列が出るが着いたところは御旅所なのかそこが本社なのか、これも判らずじまいだったが、作者の撮影のウエイトからみて、祭の主体はどうやら行列が着いた所にあるのかも。あまり世間に知られてないのか観客は少なく、かなり引いた距

離からの超ロングが行列以外にひとり一人うつっていない祭も最近ではめずらしい。

それはともかく随所にアップを効かせた内容はやっぱり江村映像。ところが祭に付き物の露天商の姿もなかったから作者としてはちょっと勝手が違ったのか、いつもの畳み掛けるアップは見られなかった。

行列の途中、天狗に扮した人が慣れない高下駄によろめくシーンがあった。横を歩く婦人も笑っていたが、ファインダーの中で見逃したか、そのあとが続かない。もし気付いていればこの作者はすぐその足元のアップを撮りに走っていただろうに。

## 11. アラスカ・大自然の中で

合原一夫さん 17分58秒

かつてのフィヨルドの跡か、陸地に深く入り込んだグレイシャー・ベイ国立公園。

作者たち一行9人を乗せたクルーザー型ボートは波静かな入江の奥へ進んでいく。見たところ20トン足らずの小さな船だがツインのベッドルームが5部屋、ダイニングキッチン、トイレ、それにシャワールームまで一通りの居住設備を備えている。船長とその奥さんとで経営する夫婦ぶねだ。

この旅行で作者ご夫婦は数多くの貴重な体験をした。最初は釣り。ほとんど入れ喰い状態で釣れた獲物はオヒョウ（カレイの仲間）。奥さんも挑戦、なんと50センチもある大物を釣りあげた。カメラの前にさし出した格好はじつに重そうだ。ゴムボートに乗り換えて次に向かったのは鮭が遡上する川。ここでも釣り、と言うより引っ掛け。群れをなしているのが釣針を投げるとすぐ引っ掛かる。ふと対岸を見ると熊がいた。「緊張が走る」のナレーションで恐ろしそうに熊を見る二人の顔。お互いを撮り合いっこしているのだが、ここらが実にうまい。そして真に迫る演出も。船に戻ってさっそく獲物の料理。夕食は新鮮なお刺身だった。翌日の朝食はイクラどん。これもきのう獲った鮭から得たもので、日本人の食生活を知った船長の奥さんの手料理だろう。船はなお奥深く進んでいく。船長に代って舵を握る作者。緊張の面持ちだった。それからはアシカ、シャチ、ラッコ、そして豪快にジャンプを繰り返すマッコウ鯨な



どをすぐ目の前で見るビッグショーになった。明けてこの日は氷河見学。ゴムボートで上陸し、氷河の現場近くまで足を運んだ。再び船でグランドパシフィックと呼ばれる大氷河が崩落する先端に到着。轟音とともに崩れ落ちる氷河を目撃。思わず歓声があがる。なんとこの小さな船にはカヤックも積んでいたのだ。そのカヤックを操って氷河に接近できたのは最高の体験だっただろう。

海に生きるさまざまな生きものたち。そして動き続ける大氷河を身近で接した作者は計り知れない感動を受けたに違いない。見る私たちも思わず息を飲んだ。18分におよぶ大作だがそれほど時間を感じなかったのは撮影構成がすばらしかったからだ。

## 12. 桜並木 (ワイド)

増池 茂さん 7分30秒

八幡市の背割堤とは淀川の三川合流地帯だろうか。こんなに多くの桜があったとは知らなかった。桜の巨木、枝、花、そのアップ、そして人と、その配分は申し分はないのだがちょっと長すぎた。この内容なら5分ぐらいが適当。音楽は2曲だが1曲目を最後まで使ってしまった。曲が終ると見る人は「これで終わりだ」と勘違いする。そして2曲目が鳴り出すと「え〜？」と思うのだ。複数の曲を使うときは1曲目が終る前に2曲目をオーバーラップさせること。

音楽とは実態のないイメージ的なもの。したがって観客は目で確実にとらえる映像より耳からの聞く情報に敏感になることを覚えておいてほしい。

## 13. 韓国舞踊

金子博泰さん 9分

韓国光州KIMUCHIFAIR in JAPANと看板にあった。催された場所は判らないが、絶好の位置から撮っているのは確か。しかし動けない。こう言う対象はいろいろ角度を変えて撮らないと見る側はよほど興味のある人か関係者でないと退屈する。9分は長すぎた。

以上で例会を終了。いつものように喫茶組と酒宴組とに別れて二次会へ向かった。

### ■フラッシュバック

～もうひとつの撮影会～ 岡本至弘

過日、5月3日と4日にOMCの撮影会が実施された。そのレポートは合原会長が執筆されるので、私は視点をかえて書いてみる。まず撮影会をするにあたっては企画担当の任務は撮影地をどこにするかだ。撮影地が決まれば、下見や、交通機関の調査、等ご苦労が多い。撮影対象がお祭りとかになれば、日時をあわせなければならない。

さて、今年は淡路島南淡町の沖に浮かぶ小さな島「沼島」に決定された。この島の様子は会長レポート等でご案内のとおりだが、車も行かない、たんぼや畑もなく、人口800人にみえない小さな漁村だ。酒屋が一軒あるだけで他に店やがなく、自動販売機も酒屋の前にひとつあるだけだった。喧噪の都会から離れて、人情豊かな、素朴な島民に合える機会をつくってくれた企画係に感謝する。

一泊撮影会の良さは、同じ趣味をもつ者どおしが寝食を共にしながら、共通の認識をもって語り合えるところにある。おそらく社内旅行などは、夜は大宴会やカラオケ大会のあと酔い潰れて寝てしまうことが多い。今回の撮影会は、夜はハモのなべ料理にしたづつみをうったあとは、部屋にもどって、お酒の好きな人は、ウイスキーの水割りや夜も更けるのをわすれてビデオ談義に花が咲き、お酒を飲まない人は、部屋のかたすみで、その日に撮ったビデオを何回もチェックしていた。ビデオクラブならではの光景だ。夜が明けると、早朝よりひと風呂あびてカメラを担いで浜辺を散歩している者がいた。少しでも良い作品をつくらうとする心掛けだろう。

撮影の目的である「島のお祭り」も天気予報の雨にもさほど邪魔されず無事に終了した。帰りのバスの中では、もう来年の撮影会は何にしようかとの話。「釣竿づくりなどはどうやるか」等の話がきこえてきた。

ゴールデンウィーク最中の撮影会。ご家族に喜んで送り出してもらった者より、家庭サービスが気になる者にとっては、心のなかでちょっぴり詫びながら、今度は、家族と一緒にハモ鍋を食べに来ようと思ひながら帰路についた。

皆さんのすばらしい作品、乞うご期待。